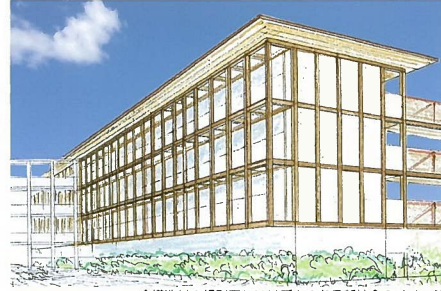


様式 1 1

「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方」及び「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩いの空間のあり方」についての提案

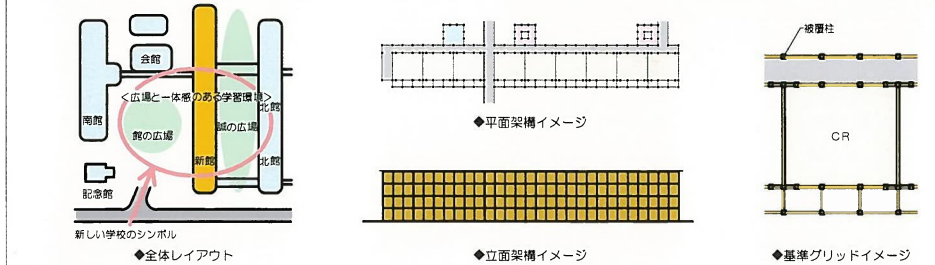
「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方

- 学校に森をつくる。160年の歴史に、現代の日本の木の伝統技術を継承した木造の校舎を建設し、豊かな自然と歴史ある生活環境を整えた自然環境にやさしい施設とします。
- 大規模建築物を木造にすることは、環境に対する問題、資源の問題などの意識を高めます。また、木造はまだ開発途上であり、新たな可能性が大きく、将来新しい学校建築の顔になっていきます。この建物で一日の大半を過ごす生徒は共に学び、共に成長していきます。木の持つ温もり、やさしさを感じ取り環境についての意識などに関心が高い生徒に育つと共に「誠」を育み未来に橋をかける「人間の館」の教育にもつながると考えます。
- 校舎の木が時間が経つことで周囲の風景と同化し、風景となり、新たな伝統・風土になると考えます。



「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩いの空間のあり方」

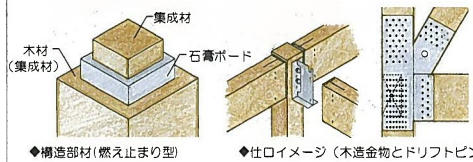
- 新校舎  
南館と北館の鉄筋コンクリートの外観の柱の水平・垂直の規則性を踏襲し、木造の柱・梁を現しにした外観デザインとします。建替えの配置は、現状とほぼ同じ位置にレイアウトします。生徒や来校される方が、坂を登りアプローチした時に最初に視線に入る木造の構造材の規律正しい規則のあるリズムで新たな伝統校の自然の温かみのある風景を迎え入れる計画とします。
- 館の広場  
既存南館と新館をつなぐ部分は、外来者を迎えるエントランスであり、学生の記念祭などイベント広場にも活用されるため、植栽は移設を検討し、現状よりスペースを広くした広場として活用を考えます。アスファルト舗装ではなく石畳などを使用する改修を行い、自然素材に触れられる場所とします。新旧の校舎、記念館（旧誠之館玄関）とのつながり、駐車スペースは現状の台数を確保出来るように計画します。
- 誠の広場  
外からはすりばち状、また丘のように見え、広場の中にも入れるスペース、通路を設けます。風、光が抜ける孔を設け広場とのつながりを持たせ、自然との一体化を図り、建築物（校舎）と環境（広場）が一体となる構成とします。すりばち状にすることで広場に中心性を持たせ、意識を中心に集め、生徒の交流や活動を促す計画とします。
- 渡り廊下  
木造トラス構造での渡り廊下を計画します。既存建物とをつなぐ渡り廊下は、校舎間をアクセスするだけでなく、幅員を部分的に広く取りステージや広場的な雰囲気を出すことで人の集まる空間をつくり、誠の広場との一体感が生まれます。



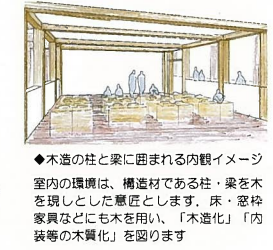
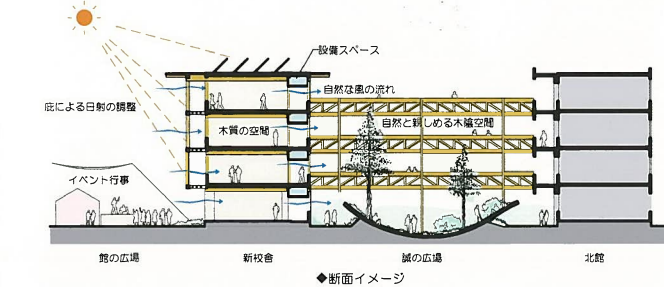
- 構造  
被覆型耐火構造（集成材）による耐火建築物  
1階鉄筋コンクリート造 2～4階木造の混構造とする。  
木造住宅産業協会にて大密認定を取得した木造耐火仕様と接合金属で木造でも鉄骨やRCと同じように自由な空間を設定でき、限られた空間をダイナミックに利用することが可能となります。木を使用することで建物全体の重量を押さえ、建物を支える基礎を小さくし、コストと工期を抑えることが出来ると考えます。また木の持つ断熱性は高く、調湿機能、結露しにくいという特性を生かします。

- 木造耐火構造にした場合、一般仕様の木造3階建と比較すると最下層での水平力が大きくなるため許容せん断力値の高い壁の設計が必要になる。設計とコスト面の検討から1階を鉄筋コンクリート造とし、2階～4階は木造で考えます。耐力壁では壁量も多くなり、意匠とのバランスも悪くなると考え、基本的にはブレース構造とし、構造体を現わしとした意匠を考えます。

- 木現しの木造耐火について（一時間耐火現し認定）  
核となる集成材を石膏ボードで囲み、その外側にさらに木材や集成材で覆う仕組み、低コストで加工し易いのが特徴。また外観は木質なので木のぬくもりを生かした建築物に仕上げる事ができます。荷重は中心部が支え、外側が消失しても倒壊する恐れがない。この認定と、壁や天井、床に木住協の大密認定を併用する事で木造耐火現しが可能となります。



- 将来の学習ニーズの多様化・社会状況に応じて柔軟に対応できるように、構造での耐震壁の設置は、将来の可変に対応できるように設計を行います。
- 「広島県公共建築物等木材利用促進方針」に基づき、内装の「木質化」、構造体の「木造化」を図り、木の持つ特性を生かした構造・工法までデザインを考慮します。
- 木造の工法  
地域材の活用、コストや断面・流通を考え、下記の方法を提案  
1) 主要構造部と2次部材に地域材を活用  
杉がメインとなるため、断面が大きくなる可能性があり、コスト面の調整を必要とするが、地域材100%という強みがあります。  
2) 主要構造部は唐松、2次部材に地域材を活用  
主要部材の断面もおさえる事ができ、また間柱や垂木（2次部材）で活用することで地域材も活用しつつコスト削減も目指すという強みがあります。  
構造部の木の調達・流通（集成材の製造、プレカット加工）には時間を要するため、設計時に施工計画を検討をします。



- 全体計画  
・敷地の東西軸に既存建物と同じように建物を配置し熱損失を最小限とする計画とします。  
・照明計画は北側と南側からの安定した採光により、自然光と人工照明で効率のよい照明計画を行います。窓にライトシェルフを設けることで、直射日光の遮蔽（熱負荷の低減）と窓の上部から反射光を採り入れ、日射制御と昼光利用とを両立させます。  
・開口部のガラスに複層ガラスを使用し、断熱性を向上させます。  
・照明スイッチは細分化し、教室の利用に応じて生徒が自ら調整節電できるようにします。また点灯時間・点灯範囲の削減、消灯忘れの防止、防犯の意味も含め人感照度センサーで部分的に管理できるようにします。
- 生徒は日々少しずつ異なる自然の動きを感じ取り、渡り廊下や広場の斜面や通路から自分の居場所や拠点を見つけ、自然とふれあうことで校歌にあるような「花のいろと雲のかけのしめす誠」「鳥の歌と風の音のさとす誠に」の風景へとつながり、創造的な個人の形成につながると考えます。卒業後の校舎で学んだ事が誇りと思えるような建物になるよう提案致します。
- 換気計画は自然換気を原則とし、外気負荷を低減する為に部分的に人感センサーにより管理できるようにします。  
・給排水計画は節水型衛生器具の採用や、雨水利用システムによる、雨水を雑用水としてトイレ洗浄・花壇・芝生の灌水に利用します。  
・敷地内の地盤面は緑化を積極的に行い、自然環境との調和を図り、地面からの照り返しの緩和を考慮します。  
・屋上は断熱機能のある材料の選定を行い、太陽光パネル（蓄電型発電設備）の設置可能な構造とし、一定の電気を賄う計画とし、非常時にも電気が供給できるように考慮します。

（注）用紙は、日本工業規格A列3とする。

「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方」及び「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」についての提案

伝統の継承と創出

①新たな伝統校誠之館を体現する日本初の「木造4階建て校舎」

構造体に日本建築の伝統的構造材である「木」を用いつつ、最新の技術によって耐火性能等を獲得したことで可能となった「木造4階建て校舎」は、まさしく今、誠之館が目指している「伝統の中の新たな息吹き」を体現した校舎です。

【環境負荷低減効果】

- ・躯体(建物)重量の大幅な低減により、必要とされる地下躯体が小さくなり、掘削(排出)土量の削減が見込めます。
- ・RC造では大量の木製型枠を消費しますが、木造躯体であれば躯体そのものがCO2のストックとして機能します。
- ・躯体自体の断熱性が高いため、RC造やS造の場合に比べ空調に必要なエネルギーが減少します。

木造とすることで、新たな環境負荷低減型校舎の先駆けとなります。

【コスト削減効果】

- ・基礎躯体が小さいため、一般的に時間とコストを要する地下部分の工事を量・所要期間ともに削減できます。
- ・試算上、建築工事費はRC造・S造と比較しても安価となる見込みです。
- ・躯体断熱性能が高いため、運用時の空調費用を低減できます。
- ・万一巨大地震等によって躯体の一部が損傷した場合、RC造であれば使用を諦めて解体・廃棄または大がかりな補修が必要になりますが、木造校舎であれば部材の交換(リプレース)による対応が可能であり、建築物としての長寿命化が図れます。

インシャル・ランニングコストの削減が可能です。

【中山間地の産業振興効果】

- ・集成材の原材料や木質内装に県産材を使用することで、県内林業の活性化の一助につながります。
- ・従来の「内装木質化」に留まらず、躯体への県産材使用の先鞭をつけることで、更なる木材利用を促進する効果が見込めます。

県産木材の新たな使用方法を実現し、県内中山間地の林業再生への嚆矢となります。

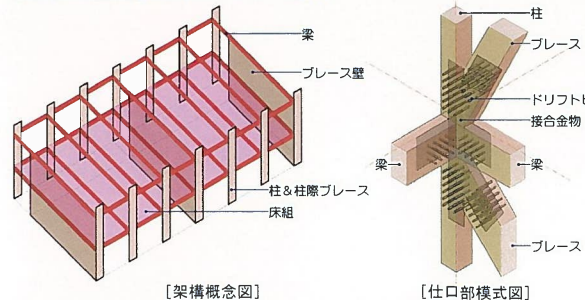
【伝統を継承するデザイン】

- ・霞町校舎、誠之会館へのオマージュを表す勾配屋根を持つ建物とします。
- ・単に形状のみのデザインにとどめず、太陽光発電を効率的に行え、かつ二重遮熱をより有効に機能させる通気層を得られる適切な屋根勾配を設定します。

伝統を継承した形の中に環境負荷低減のための最新技術を盛り込みます。

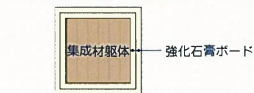
②木造4階建て校舎を可能にする技術

【集成材と接合金物によるピン&ブレース構造】



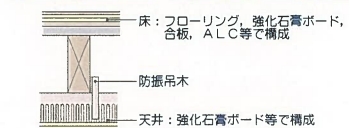
- ・材質の安定した集成材を金物を用いて接合してピン&ブレース構造とし、確実に構造耐力を得られる構造体を構成します。
- ・構造材は接合金物をセットした状態で現場に搬入されるため、建方が容易であり、特殊な技能を必要としません。

【新工法で耐火性能を確保】

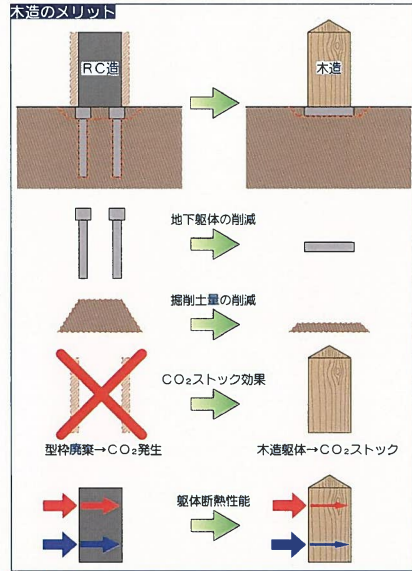


- ・強化石膏ボードを用いて構造躯体を保護し、耐火建築物に要求される耐火性能を確保します。

【厚さ15cmのコンクリート床に相当する床遮音性能】



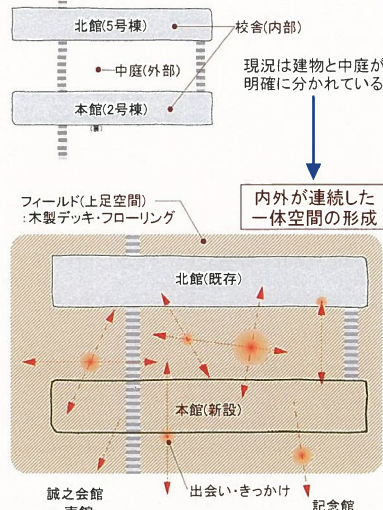
- ・住宅性能評価基準の重量衝撃音対策等級において、相当スラブ厚15cmに相当する構成とします。
- ・防振吊木を用いて固体伝播音もカットします。



既存建物と一体となった誠之文化空間の創造

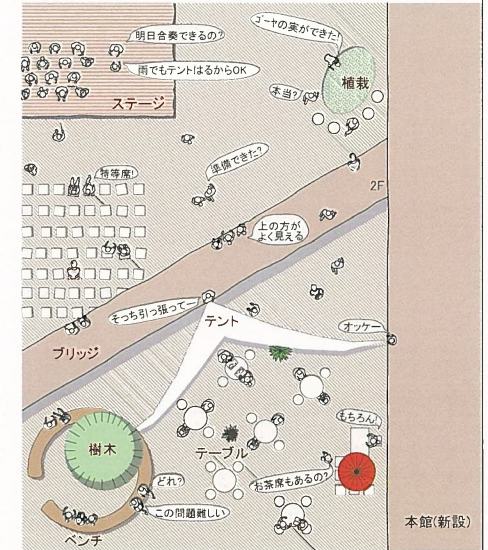
①フィールドをつくる

進入部分の広場から5号棟を含めたエリア帯を連続した空間として捉え、全体を一つの「学び舎」とすることを考えます。まずは屋内外にわたってエリア帯の床面を同一(又は類似)素材で統一し、ひと続きの大きなフィールドをつくります。このフィールドを全て上足ゾーンとすることで、内部と外部が連続した大きな日常空間が形成されます。こうして時間的・空間的に今まで以上に繋がりのある学校生活が可能となり、より多くの出会いやきっかけを育みます。



②アクティビティを誘発する

フィールド上には生徒や教職員の止まり木や絡まり代となる様々なアイテムを用意します。何気ない場所やちょっとした事があるような活動(=アクティビティ)を誘発し、それによってごく自然にコミュニケーションやプレゼンテーションを行う機会が発生します。こうした場が身近にあり、それが日常生活の一部となっていることは、個々の生徒のアイデンティティや主体性を育てていく上で非常に有効なものと考えます。



③アクティビティの連鎖が文化を育む

個々のアクティビティが連鎖して、より多彩なシーンが生まれます。こうして豊かで潤いのある学校生活が営まれ、誠之館の文化を育てていきます。



# 「誠」の精神を育む空間づくり・・・歴史と伝統を受け継ぎ未来へ飛躍する誠之館高等学校

## ■「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方について

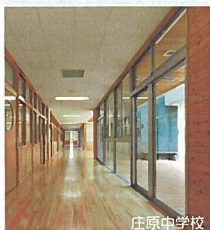
創造と継承を繰り返しながら伝統は形成されます。私たちはその場所にある自然・素材を最大限生かした空間を創造し、既設デザイン等を継承することで一体感のある新たな伝統の形成を図ります。

### ○伝統を感じる風格あるデザインの継承 【図4・5】

- ・広場側の外壁面は、基礎部・上層部・頂部の三層構成とし、**ヒューマンスケールな外観**とします
- ・基礎部は、誠之会館1階の石目のデザインを踏襲し、正門から見た建物の統一感を図り、重厚感と風格ある建物とします。
- ・上層部は、既存南館等のように柱型の出た堀の深い形状にする他、新たな素材となる**ライトシェルフ**を設け環境に配慮します。
- ・頂部は、南側を**勾配屋根**とし既存棟との調和を図ると共に、太陽光発電も取り付けられる構造とします。

### ○木材等を利用した落ち着いた環境 【図7・9・10】

- ・汚れや傷みの激しい腰壁部分や外部天井等には県産の杉板を、床には県産、檜のフローリングを使い、調湿作用や温もりのある木材を多く使う事で、**健康的で潤いのある空間**とします。
- ・テラス床もウッドデッキを使い、木や緑の落ち着いた空間とします。
- ・木材や石等は**歴史を刻む材料**として古びてなお美しい本物の素材を使います。
- ・建材・塗装材料等はF☆☆☆☆とし、シックハウスのない空間とします。



【図7】木材の利用イメージ

### ○多様化する学習環境への対応 【図3】

- ・普通教室においても、パソコンや電子黒板を利用した授業に対応出来る**ICT環境を構築**するためにLANやLANの無線化等に配慮します。
- ・教室のある階へは教材倉庫を設け、**スムーズな授業展開**が出来るようにします。
- ・スグルトンフィルの考えより、教室間の壁は軽鉄仕様の壁とし、将来の改修などにも、対応しやすい構造計画とします。

### ○明るく開放的な空間づくり 【図5・8】

- ・教室の南側窓面には**ライトシェルフ**を設けることで、夏の強い直射光を遮り、温度を下げると共に、反射した光が天井を照らすことで、部屋全体が明るくなります。
- ・最上階の教室は、勾配屋根を利用した**ハイサイドライト(高窓)**を設け、廊下側も明るい内部空間とします。
- ・教室前には極力、部屋を設けない様にし、風通しが良く、視覚的にも**開放感のある空間**づくりを行います。



【図8】ライトシェルフイメージ

## ■「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」について

良き友人・先輩・先生と出会い、いろいろな局面を見て自身を見つめる。「誠の精神」は集団の中で育っていきます。私達はいろいろな、ふれあひ空間をつくり、生き生きとした学校づくりを目指します。

### ○機能的で楽しい動線づくり 【図1・3・5】

- ・南側の1階には、外廊下を設け、天候に左右されずに歩ける歩行空間とし、**歩車分離にも配慮した動線**としています。
- ・外廊下の照明で、エントランス廻りは夜でも明るく、定時制の生徒達も**暖かく迎える施設**となります。
- ・既設校舎をつなぐ渡り廊下には、膨らみを持たせ中庭と一体的な**回避性と異質性のある空間**としています。

### ○多目的に使えるテラス空間 【図3・10】

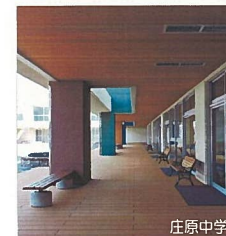
- ・各階の北側にはテラスを設け、中庭を見下ろす**コミュニティスペース**とします。
- ・廊下とテラスの仕切りは**折れ戸**を採用する事で、開けると廊下とテラスが一体となり、膨らみのある開放的な半外部空間となります。
- ・この空間は、交流の場やワークスペース等にも利用出来る**多目的空間**となり、**みんなの憩い空間**となります。



【図9】半外部空間イメージ

### ○ユニバーサルデザインに配慮した安全・安心な施設 【図3・10】

- ・建物内は誰もが使いやすい施設となるように、ユニバーサルデザインを徹底する他、上履きのままで外部に出れるテラス空間を設けることで外部に対しても**バリアフリーな、ふれあひ空間**を確保します。
- ・既存建物の階高が違う為、渡り廊下には**スロープ**を設け調整します。渡り廊下もきめ、開放部分には滑りにくい材料を使い、**安全な歩行空間**とします。



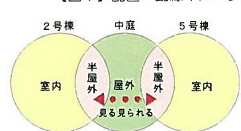
【図10】1階テラスイメージ

### ○環境負荷の低減 【図3】

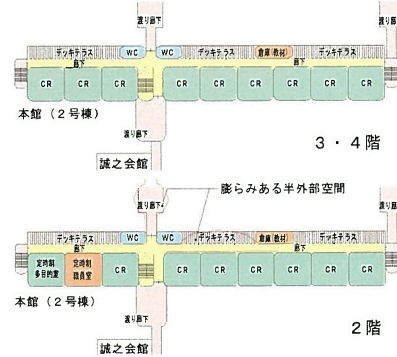
- ・**遮熱・断熱塗料**による外装で、夏場の外部からの熱をカットし、冬場の室内の熱を逃さない計画とする他、開口部は**複層ガラス**を採用し、空調負荷の低減を目指します。
- ・LEDや高効率照明・人感センサー・節水型便器など、省エネを意識した計画とします。
- ・夏場の夜間冷気で建物を冷やす**「ナイトバージ」(夜間換気)**も積極的に行うことができる計画とします。
- ・中庭植栽への散水やトイレ洗浄等の節水の為、**雨水利用**を検討します。



【図1】配置・動線イメージ



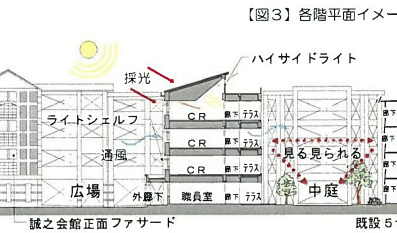
【図2】建築空間模式図



3・4階



2階

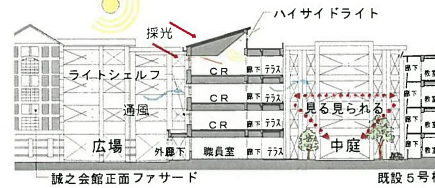


1階

【図3】各階平面イメージ



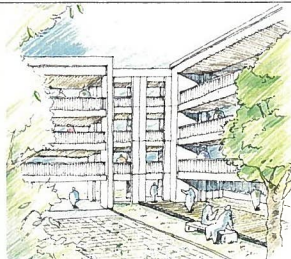
【図4】立面イメージ



【図5】断面イメージ

### ○緑の中庭空間 【図3・6】

- ・中庭は、芝やブロック・植栽で、日射の照り返しを軽減すると共に、**緑あふれる憩い空間**とします。
- ・テラス等の半外部空間は、**見る見られるの関係**を強め、中庭と一体的な、ふれあひ空間となり、集会やイベント等に最適な空間となります。
- ・5号棟前の植込は、日当たりも良く、テラスからの眺めも良いので**四季を感じる植栽計画**を行います。
- ・中庭に現存するブロック・植栽の他駐輪場の土間もカットや補修を加え、芝と一体的な通路として再利用します。



【図6】中庭イメージ

テーマ1

「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方について

■伝統校として建学の精神や風格が感じ取れる施設

●列柱

『天は誠の道なり、これを誠にするは人の道なり』（神が求めた究極の道である誠を身につけるよう努力することが人としての道である。）は誠之館高校の建学です。これを表現する方法として列柱を採用しました。古来、柱は天と地をつなぐものであり、誠を身につけるため努力していくことが、天の道につながるという建学に相通ずるものがあると考えます。また、柱は建物を支える大事な部材であり、力強さを表現できます。それを並べていくことにより、建物に風格を感じさせることが出来ます。

■「新たな伝統校福山誠之館の創造」に相応しい品確と落ち着きを兼ね備え明るく清潔感があり、伝統のなかにも新たな息吹が感じられる施設

●規則正しさ

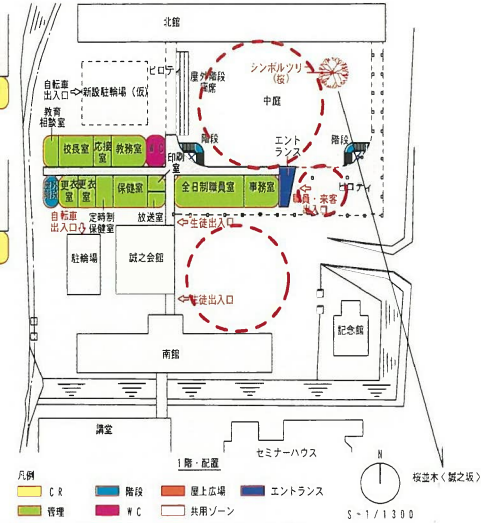
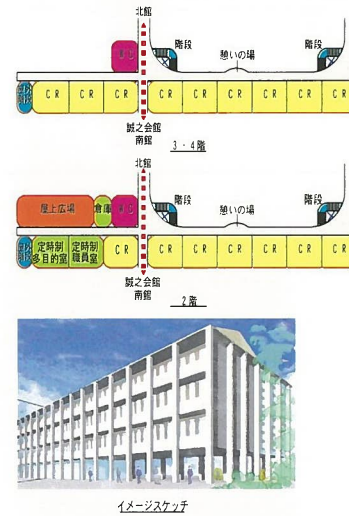
建学の精神や風格を表現するための柱ですが、等間隔で配置することにより、落ち着きと品確を感じることが出来ます。

●現代的な開口部

南側はバルコニーを設置し開口部を大きくとり、明るい教室を作ります。渡り廊下は柱と柱の間にカーテンウォールをはめ込み、ガラスによる清潔感、開放感を演出します。ガラス面を大きくとることにより、現代的なイメージも感じさせることができます。

●環境配慮型施設

南面はバルコニーを設置し、直射日光の入射を軽減します。また、南面屋根に太陽光発電パネルを設置する等、環境に配慮します。



テーマ2

「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩いの空間のあり方」

■北側 特別教室棟（5号棟）との機能的な連携

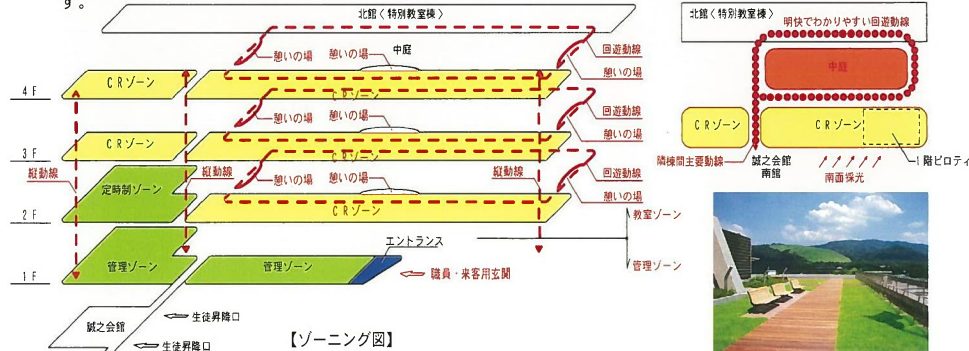
●回遊性

新館の廊下、及び北側 特別教室棟（5号棟）と接続する渡り廊下を充実させます。幅員を広くとり、テーブルやイスを設置し、憩いの場として、または、生徒の作品発表の場としての展示スペース等に利用します。渡り廊下に変化を持たせることにより、特別教室棟との間で回遊動線が発生します。人間は、まず行動を起こすことで自立の精神を養うことができます。その延長として、興味のある展示、友人とのコミュニケーションを通し、豊かな精神を育てていくことができます。

■四季の移り変わりが感じられる施設

●シンボルツリー

特別教室棟と新館の間に動的空間（イベント空間）を配置します。この空間は部活の練習、集会、書道パフォーマンス、吹奏楽ミニコンサート等、活動的な空間として整備します。従って、障害物となるものはあまり設置しませんが、シンボルツリーとして桜を植樹します。桜は広葉樹であり、四季折々で樹景が変化し、移り変わりを感ずることができます。また、通学路の桜並木とも関連づけられ、敷地としての一体感も生まれます。



●平面計画

基本平面図をベースとし、ピロティ空間を確保するため、校長室等の1階管理ゾーンの一部を連絡通路を挟んで西側へ移動。移動したボリュームの2階部分は屋上広場とし、新たな憩いの空間を創出しました。



【配置・平面図、イメージスケッチ】

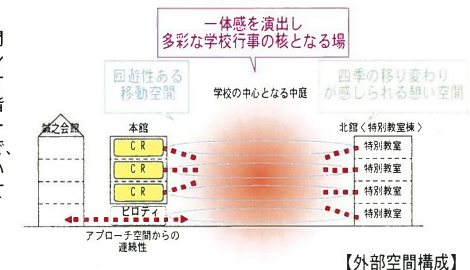
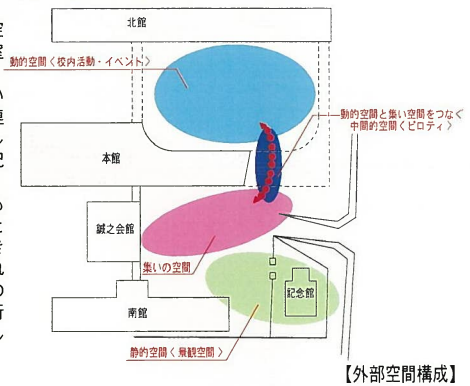
■教育・学校行事を含む多彩な場面で活用できる憩いの空間のありかた

●空間の整理

外部空間を記念館周囲の静的空間（景観空間）、誠之会館前の集いの空間、特別教室棟と新館の間の動的空間（イベント空間）に性格を分け配置します。動的空間と集いの空間を新館ピロティの半屋外空間で連続することにより、全体を大きな空間として認識することができます。静的空間は記念館周囲の日本庭園を觀賞する空間です。誠之会館前は昇降口までのアプローチでもあり、登校時の授業が始まるまでのひととき、下校時のバス等の待ち時間のひとときを友人とのコミュニケーションにあてられる集いの空間です。特別教室棟と新館との間の空間は、動的空間と位置づけ、学校行事や部活等で多目的に利用できる空間とします。

●多彩な場面で活用

特別教室棟と新館との間の空間は、校舎、渡り廊下に囲まれたほどよい閉鎖的な空間です。それ故に、集会、書道パフォーマンス、吹奏楽ミニコンサート等で利用しやすい空間となります。それを助成するため階段状の座席を設置します。新館ピロティは、集いの空間を接続する中間的な空間で、雨天時、炎天時にはこの場で集会、あるいは友人とのコミュニケーションの場として利用できます。





「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方」及び「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」についての提案

「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方

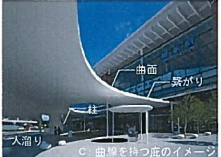
● 未来へつなぐ、歴史と伝統



A: 記念館のかつての役割



B: 都市中の高い緑のイメージ



C: 曲線を持つ庇のイメージ



D: 階段室のイメージ



E: 新創設車

■ 「間（ま）」をつくる庇（A）

記念館は、かつて校舎の玄関口でした。生徒は唐破風屋根の下で脱靴しながら学びの場へ向かっていました。そこは、日常生活から学びの場へ気持ち切り替わってゆく「間」でした。誠之坂を上りきり、脱靴場までの間に呼吸を落ち着かせ、学びの準備を整える「間」を現代に再生させるため、庇を提案します。日中は落ち着きのある日陰を、夜間は明るい玄関ポーチとして生徒をやさしく迎え入れる空間をしつらえ、玄関口である誠之会館の正面性を強調します。

■ 記念館をトリミングする庇（B）

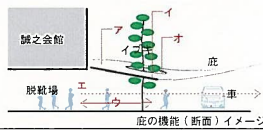
精神性の高い庭には必ず庇があり、半屋外空間を形成しています。庇で視界をトリミングする、伝統的な建築手法で記念館の見え方を強調し、敬意を暗示する空間とします。誠之会館より振り返ると、誠之館桜、門、記念館、セミナーハウス、植栽など、品格ある広場を意識的に眺めることができます。

■ 唐破風をモチーフにした庇（C）

記念館の唐破風屋根と入母屋屋根の曲線形状は、特徴的なモニュメントで、誠之館高校の歴史性を感じます。その曲線をモチーフにした庇で脱靴場から、イブキを包み込みながら玄関まで連続させ、既設の建物、新設建物、そして外部を繋ぎます。

・多機能な庇

- ア：雨を防ぎ、日陰を形成
- イ：軒先を下げ、車と人を緩やかに分節
- ウ：多くの生徒を受容でき、「間」をつくる半屋外空間
- エ：軒先を下げ、空間を絞った記念館への眺望
- オ：光を取り込み、イブキを包み込むポイド



庇の機能（断面）イメージ

■ 福山城を望める展望階段（D、E）

福山城、記念館を結び延長上に階段を配置します。東側渡廊下からも眺望の確保ができる開放性をもたせ、展望的な空間に計画します。記念館、セミナーハウスの屋根、まち並み、山並みといった美しい風景を、各レベルごと、または、時間帯で異なる景色を見ることを楽しみ、授業と授業の移動時に視覚的な豊かな彩を添え、潤いを与えます。

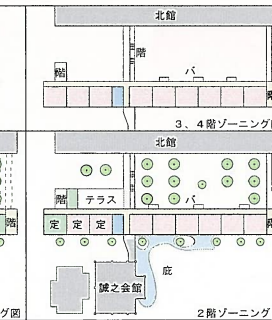
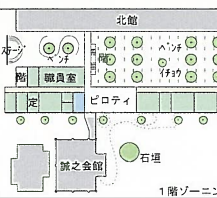
■ 静寂な諸室（E）

中庭と広場の間に廊下を計画して、諸室の静寂さを確保します。「建学の精神」を象徴する記念館、誠之館高校の伝統を感じる誠之桜、イブキ、石碑、良好な眺望、そして光を室内に取り入れられるようにC/R、各諸室を南面に配置します。

■ テラスを持つ職員室（K）

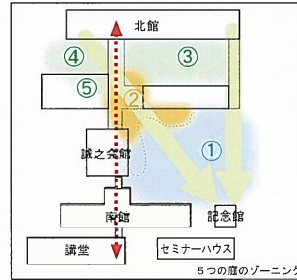
中庭に計画し、生徒を見守りやすく、生徒と教職員のコミュニケーションが生まれる憩いの場を提案をします。

管理室	1 階床面積：1,104 m <sup>2</sup>
トイレ	2 階床面積：958 m <sup>2</sup>
教室室	3 階床面積：922 m <sup>2</sup>
屋外	4 階床面積：922 m <sup>2</sup>
合計	合計床面積：3,906 m <sup>2</sup>



「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」

● 北館と記念館を結ぶ軸線の上に、5つの庭



■ ①精神性の高い庭を継承（B、F）

記念館、石碑、植栽、誠之会館、南館などの歴史や伝統校の雰囲気継承します。

■ ②誠之館高校の核となる庭（ピロティ）（F、G）

- ・生徒が日常生活から学びの空間へはいつくる中間領域とします。
- ・精神性の高い静寂な庭と、賑わいのある動的な庭との接点となる庭とします。
- ・既設校舎と、新設校舎の接点となる庭とします。
- ・たくさんの生徒を受容できる空間とします。
- ・誠之会館周辺が明るく、風通しの良い庭とします。

■ ③上足でアクセスできる広い庭（H）

- ・様々な場所から上足で中庭にアクセスできます。
- ・床素材に、歴史を継承する敷石を再利用します。
- ・記念樹を植えるなど、将来部分的な取外しが可能なインターロッキングブロックを計画します。なお、インターロッキングは再生材でつくられた保水性のあるものを利用し、気化熱作用によって中庭の温度上昇を抑えます。
- ・広島県産材でつくったベンチを計画し、たのしい雰囲気をつくります。
- ・広い中庭に木陰をつくるため、樹木を配置し、あらゆる包容感を与えます。記念樹（イチヨウ）と同様に、四季を感じやすい広葉樹を計画します。
- ・庭のグランドレベルにわずかな勾配をつけ、包容感と、視覚的な魅力を生み出します。

■ ④包容感のある小さな庭（H、J、K）

- ・西側には階段ステージを計画し、継続して催物の中心の場となるように考慮します。
- ・北館の食堂と庭を挟んで職員室を配置し、昼食時は生徒と教職員と一緒に昼食をとるなど、コミュニティの活性化を図れます。

■ ⑤中庭、ステージ、渡り廊下を見渡せる庭（屋上テラス）（I）

- ・職員室の屋上に計画し、定時制の生徒と、全日制の生徒が集える場所を提供します。
- ・2階の屋上テラスは、渡り廊下と一体となった広い憩いの場とします。

■ 展望台になる渡り廊下

- ・北館から講堂までの動線を直線とし、機能的な動線計画を行います。
- ・見通せる視界は広場（1）と、中庭（③、④）を緩やかに繋ぎ、高校全体の一体感を生み出します。
- ・ゆとりのあるスペースで、中庭やグランドを見渡せる展望的な廊下を計画します。
- ・S造で部材をスリムに計画し、グラウンドに向けての抜けを確保します。

■ 中庭を望めるバルコニー（L）

- ・配管、ダクト、空調室外機を見苦しくないように設置するスペースとなります。日常のメンテナンスや、十数年の設備更新時による付帯工事の軽減を図ります。
- ・校舎と中庭を繋げるため、中庭に面する校舎の壁面にバルコニーを計画し、建物に表情を与えます。
- ・生徒が集える場所にし、見上げ、見下ろしといった中庭とのアクティビティの連携を図ります。

■ その他の提案・配慮事項

- ・南面の窓上に庇を計画し、陰影をつくり品格のあるファサードを計画します。
- ・衛生器具に節水型の機器を計画します。
- ・照明器具に省エネルギー・長寿命で高効率なものを計画します
- ・H f やLEDを中心に選定し、初期照度補正器具や、昼光利用照度制御の導入により日中の電力削減を図ります。
- ・屋根、外壁面に遮熱塗料を施し、躯体が蓄熱しないようにします。



F: 静寂なピロティのイメージ



G: 賑わいのあるピロティのイメージ



H: 規則正しく並ぶベンチのイメージ



I: 屋上テラスのイメージ



J: 階段ステージのイメージ



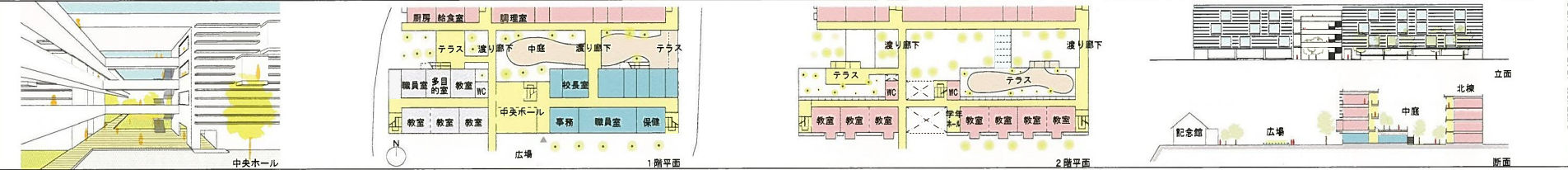
K: 職員室と中庭のイメージ



L: 表情のあるバルコニーのイメージ

イメージ写真（A：誠之館高校HP、B：徳安寺石庭園、C：船木駅西口駅前広場、D：府中高校屋外階段、E：誠之館高校HP、F・G：基町高校ピロティ、H：立正大学、I：誠之館高校HP、J：大阪大学箕面キャンパス、K：豊北高校、L：岐阜県産住宅イタワタ北方高橋様）

「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方」及び「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」についての提案



「新たな伝統校誠之館の創造」に向けた施設づくりのあり方

誠之会館、記念館、さらに石柱の門や管理棟前のカイツカイブキ等、歴史と伝統を感じさせるものを最大限尊重した計画とします。その実現のため、新館に中央ホールを設けます。中央ホールによって北館、中庭を歴史的雰囲気のある広場につなげることができます。「つながる」というコンセプトを教室、廊下、渡り廊下まで展開することで、伝統を感じるとともに、明るく開放的な学校空間が生まれます。

ゾーニング

- 2階、3階、4階にそれぞれ1年生、2年生、3年生の教室群を配します。各フロアには教室、トイレ、学年コミュニケーションスペースが設けられます。
- 1階は西側に定時制、東側に管理諸室を配します。
- 定時制ゾーンは、トップライトのある中廊下の南側に3教室を、北側に1教室、多目的室、職員室、保健室を配します。
- 管理諸室は、トップライトのある中廊下の南側に事務室、職員室、保健室を、北側に校長・応接室、教務その他の諸室を配します。
- 教室は明解にゾーニングされますが、中央ホールによって相互につながり、一体感が生まれます。

コミュニケーションスペース

- 様々な単位に対してコミュニケーションスペースを設けます。教室単位に張り出しスペース。学年単位に中央ホールに面したコミュニケーションスペース。全体に向けて中央ホール。学校生活を豊かなものにしていきます。

教室と廊下

- 教室と廊下を少し離します。教室の南側は少し張り出してコミュニケーションスペースを設けます。
- 廊下を少し離すことで、吹抜を介して廊下、教室の上下に連続性が得られます。また、教室は廊下と離れることで落ち着いた場所となります。教室出入口における出合い頭の事故の懸念も少なくなります。張り出しスペースからは他教室の様子がうかがえ、教室間をつなげるスペースとなります。また、休憩時間、放課後も含め多様な利用が可能となります。
- 教室への出入口、教室間の壁はフルオープンにできるようにし、将来の変化に柔軟に対応できるようにします。

室環境

- 教室を両面開口とすることで良好な日照、採光、通風が得られます。南面には建物メンテナンス用の足場も兼ねた、日除けルーバーを設け、直接の日射を避け、省エネルギーの室環境を実現します。

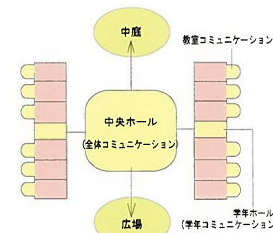
景観

- 高台の上、建物群に囲われて建つ長大な建物です。中央にありながらも、既存の建物や新たな外部空間の背景となるような表現がふさわしいと考えます。
- 90m近い建物なので、中央ホールによってボリュームを分割して威圧を避け、ルーバーによって階や柱のスパンの表現を消去して、背景にふさわしい表情とします。結果として、品格と落ち着きを兼ね備えた、凜とした景観を提供すると考えています。

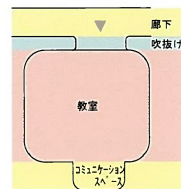
明解なゾーニング



各単位のコミュニケーションスペース



独立性の高い落ち着いた教室



「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」

誠之会館、北館をつなぐ南北の軸線、新館の東西の軸線、4階までの縦の軸線は中央ホールで交差し、生徒、教職員の動線は多様な選択ができます。中庭、広場はそれぞれ特色を持った場所となりますが、中央ホールによって連続した外部空間となります。また、中庭は立体的な構成となり、利用の幅を広げます。

動線計画

- 現状の動線を踏襲します。
- 南北のメイン動線は中央ホールの端を横切り、ホールを介して各フロアとのつながりを意識づけします。中央ホール階段は縦動線の軸となります。
- 東側渡り廊下は上下で廊下をずらし、相互につながりをもたせます。1階はテラスとして土足ゾーンの外部空間の利用の可能性を広げます。1階の渡り廊下は管理棟中廊下が中ほどにつながります。ガラス屋根のテラスのような廊下とし、視線をつなげることで中庭の一部として機能します。

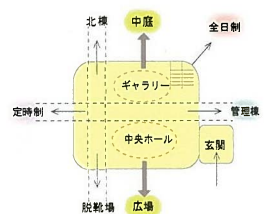
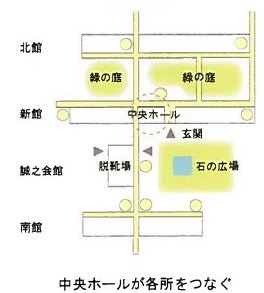
中央ホール

- 平面約15mx5m 高さ約15mのホールを設けます。縦動線の軸となる階段と、南北動線の軸となる渡り廊下が交差します。ホールの吹抜に向けて、学年コミュニケーションスペースが付加されます。
- 南館と北館、北の中庭と南の広場を連続させます。定時制と全日制、各学年を結びつける場所でもあります。誠之会館1階で履き替えた学生は、まずこのホールに入ります。一般来校者もすぐ横の玄関から入ります。
- イス、テーブル、水飲み場、掲示板、ギャラリー等が設けられ、コミュニケーションと憩いの場となります。

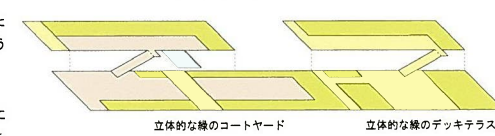
中庭と広場

- 北の中庭は植栽空間とし、四季の移り変わりを体感する憩いの場とします。渡り廊下の東は土足中心の庭です。管理室屋上にも上げられる立体的な庭です。屋上の緑化は上階にも憩いを提供します。
- 渡り廊下西側は上履き中心の庭です。木立に囲まれたデッキのテラスが設けられます。東側と同様、屋上も使う立体的な庭で、2階からもアプローチできます。調理室、食堂との関連でアウトドアの食事も可能です。
- 南の広場は石の広場とします。管理諸室前と記念館周辺に緑を集中させ、誠之会館、記念館、その他の棟の存在を明確にします。石の広場は碑等を移設し、広々とした矩形的広場とし、中央には稲を植える等、四季を表現するスペースとします。

明解な動線



立体的な2種類の中庭



様々な特徴ある場所をつくる それらが つながる ことで 過去（伝統）と 未来（新しい息吹）が つながる

「“新たな伝統校誠之館の創造”に向けた施設づくりのあり方」及び「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」についての提案

■「“新たな伝統校誠之館の創造”に向けた施設づくりのあり方」についての提案

開校 160 周年を迎えようという福山誠之館高等学校も幾度となく改編が行われ、現在の全日制本校総合学科 7 組と定時制普通科 1 組の体制となっている。なかでも 15 年前から採用された全日制の総合学科というシステムへの変換は大きなものだったと考えられる。ただしそのシステムに対応するべき学校施設は、従前（特別教室型）のままであり、充分にであったとはいえないと思われる。では今回の 2 号棟の改築にあたり、普通教室を単に生徒の居場所としてのホームベースとしてのみ考えて行くのかどうか？誠之館高等学校にはホームルーム等があり、今までの普通教室としての利用もできる 2 段構えの対応が必要だと言えます。

では、生徒の自主性・自立性を高め、進路や職業選択を視野に入れたカリキュラムのもと、生徒の希望に応じた教科・科目選択のできる総合学科の特徴を生かした施設づくりはどうか。生徒の自主性・自立性を高めるには何が必要か？と考え、それは過剰な保護や干渉ではなく、つくられた「ゆとり」でもない。生徒自身が本来与えられた、生きていく知恵がより強く働くよう、存分に想像力を発揮し、自分で考え、自分で行動することができる「自由」である。この自由を感じ取れる空間づくりこそ必要ではないだろうか。具体的には、施設として全てをつくりこまないで、あえて意識的に余白のスペースを残すようなづくり方である。

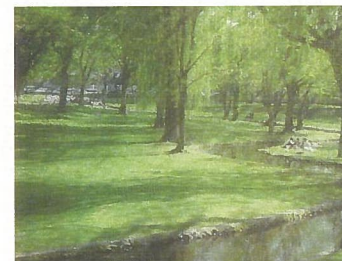
本来廊下は、画一的に並び普通教室を機能的に結ぶもので、管理・運営上の観点から全体がほぼ見渡せるように計画されてきた。そこで教室とは反対側にわざとテッパリを設け、廊下のメイスストリートからは見渡せない自由な空間を設けるのである。そこにテーブルと椅子を置き、それを生徒が自由に利用し、生徒の居場所として利用する。個であったり、グループであったり。総合学科が決定付ける専門化された集団がそこに対応して集まる。つまり、あるコースを選んだ生徒たちがクラブ活動と同じような感覚でそこに居れるようになるかもしれない。メイスストリートを他の生徒が通れば何をしているのか判るであろうが、それで良いのである。子供部屋での勉強よりダイニングテーブルでの勉強のほうが効率が良いそうです。

これまでの学校教育では、「皆が一緒になる」ことに重点が置かれていましたが、これからは、一人一人が「個性豊かな人間」の育成を目指した教育が求められています。人間はお互いに他人を見ながら個性豊かになっていくのであって、自分ひとりだけで個性的になどなれるはずがありません。これからの新しい伝統を築いていくのは、生徒達です。その手助けをするのが教職員です。そしてこの施設もその一助になることを願います。

■「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」についての提案

今回の 2 号棟の改築可能範囲の南側には、平行する形で 6 階建ての特別教室棟（32 号棟）があり、そこに繋がる渡り廊下と誠之会館が、直行する形で西側に寄って建てられています。北側には、同じく平行する形で 4 階建ての特別教室棟（5 号棟）があり、渡り廊下が東端と中央西寄りに直行して建てられています。南側からの日照・採光・通風を考慮すれば、現状とほぼ同じ位置での建替えが最適と考えます。また渡り廊下の位置もそれに繋がる特別教室棟の平面形状からすると、おのずと現状と同じ位置が最短距離となります。

では、建物がほぼ現状と同じ位置での建替えとなったとき、どのようにして憩いの空間を創出すればよいか。桜並木の誠之坂を登り詰め敷地内にたどり着くと、まず、誠之館高等学校の歴史や風格の感じられる玄関前の広場が迎えてくれる。この雰囲気はこのまま残したい。そして 2 号棟と 5 号棟の中庭部分。ここを生徒たちのくつろげる癒しの空間としたい。具体的には、雨水利用の提案である。各棟の雨水を集め、西側渡り廊下の西側に地下貯水槽を設け、ろ過処理後に再利用する。この水を利用して、中庭にはピオトープや小川のせせらぎをつくり、芦田川の水辺を再現したい。数本の中高木と芝生を植え、緑と木陰をつくり、四季の移ろいを感じ取れる場所としたい。そこにガーデンテーブルを置けば、こども豊かな発想の生まれる自由な空間となるであろう。一人本をひろげ読書に耽るもよし、友と悩みを語り合うもよし。人生で一番多感な時期を過ごす高校生活の中で、「何か」を感じ取ってほしい。



建物の外観デザインは、振分け曲面片流れ屋根が特徴的な 32 号棟のイメージを取り入れた形の勾配屋根とし、南側から続く波を連続的なものとして表現したい。

※ 1 「“新たな伝統校誠之館の創造”に向けた施設づくりのあり方」及び「既存建物とのつながりを考慮した豊かな精神を育む憩い空間のあり方」の 2 つのテーマについて、本様式 1 枚にまとめてください。

※ 2 提出者（協力事務所を含む）を特定することができる内容（具体的な社名等）を記載しないでください。

※ 3 文章を補完するための最小限のイメージ図等は別紙 9 ①のとおりです。別紙 9 ②の鳥瞰図及び透視図のような建物イメージが表現されたスケッチを、規定する範囲（150 平方センチメートル以内の大きさで位置は任意）1 箇所限定して記載することを認めます。

（注）用紙は、日本工業規格 A 列 3 とする。